

訂正とお詫び

「山と花のたより」104号で、青紫色の花の写真(右)を載せ、「シソ科アキギリ属アキギリ」と書きましたが、これはアキギリではなく、同じシソ科のミソガワソウでした。訂正してお詫びします。(写真は石鎚山で)

味噌川は木曾川の一支流。その名をもらったそうです。また葉裏からの匂いでミソカソウ(味噌香草)とも呼ばれるとありますが、私は香を嗅ぎませんでした。



ミソガワソウ

二上山だより



蓼食う虫も好き好きということわざはタデ(ヤナギタデ等)が独特の強い辛味をもつことから生まれたもので、少し変わった好みを持つ人に対し、揶揄的に使われたりします。そのくせ人間もタデを香辛料として利用し食べているのです。刺身のつまや鮎の塩焼きにかける蓼酢がその例です。

ところが**イヌタデ**はタデの仲間なのに辛くないので、役立たずの意味でこの名がつけられています。犬に対してもこの植物に対しても失礼ですよ。

しかし**イヌタデ**の方は人間の勝手な命名を咎めもせず、身近に可愛い花を見せてく

上 イヌタデ れ、二上山雌岳頂上でも夏から半年近くも咲き続けています。

子どもたちがこの植物の実をままごとに使って赤飯がわりにしたことから**あかまん**まとも呼ばれますが、こちらの呼び名の方がこの花にふさわしいと思いませんか。

ちなみにタデを食べる虫としては**ホタルハムシ**が知られています。

下 ツルリンドウの実



下 リュウノウギク



ヒガンバナ(まんじゅしゃげ)の不思議

この文は「健生会友の会」の機関紙「ふれあい広場」2009年11月号に掲載されたものを編集者の了解を頂いて転載するものですが、転載の際加筆しています。



9月下旬同窓会旅行で四国を旅しました。愛媛県の瀬戸内海岸でも、高知四万十川の岸边にも、徳島祖谷(いや)の高所の道路沿いにもヒガンバナが赤々と咲いていました。また数年前夜行列車「日本海」で秋田まで行った時、奈良で咲いていたヒガンバナが新潟でも、山形でも、秋田でも田畑の畦を彩っているのに驚きました。

ヒガンバナは9月全国一斉に「彼岸」の前後に花を開きます。不思議ですね。

この謎に挑戦した多くの人達は「気温の変化による開花」に着目しました。ある研究ではヒガンバナの開花は20℃～25℃の気温で始まるとされており、気温が一定関わっているようです。しかし

毎春テレビ、新聞を賑わす「桜前線」のような、地方による「開花時期のずれ」はヒガンバナでは見られません。4月と9月では日々の温度変化の度合いに差があるのかもしれないませんが、高度、緯度の違いを超えてのヒガンバナ一斉開花を「気温の変化による」説では十分説明できていないように思われます。

又、この植物が地中からいきなり花茎だけを伸ばして花をつけることから、「日照の変化による」というのも「完全な説明」にはならないようです。

成る程と思うのは、「彼岸花は体内時計によって一年の時間を計っている」という説です。現在では「生物は体内に時計(の機能)を持っている」のは事実とされていますが、「年周リズムの存在については、まだ多くの研究が行われているわけではない」(ジョン・D・パーマー「生物時計の謎をさぐる」2003年刊)そうです。今後、地球温暖化の中でどうなっていくのか、興味津々ですね。

ヒガンバナはよく目立つ派手な花をたくさん咲かせますが、実を結びません。ごくわずかに結実してもほとんど発芽しないそうです。従って遺伝子は全国同一とされています。実がならないのに全国津々浦々に繁殖しているのも驚きですね。ヒガンバナは球根(鱗茎)で増えますが、その鱗茎や茎、葉に含まれる毒を嫌ってミミズ、モグラなど畦に穴を開ける生物が来ないので、人間に珍重されています。秋の取り入れ前の草刈り直後に花茎を出して開花

冬の畦で生い茂り養分を蓄えます

するので「ヒガンバナだけ残して上手に刈ったものだ」と思ってしまいます。農作業のスケジュールに適合したような生態などこの植物には不思議がいっぱいです。

以上 107 号

